

この子らを世の光にと願い 助け合うこころを育む

療育援助

心身に障害のある人とのかかわりを通してボランティアの心を育み すべての人々が共に良い人生を送れる社会づくりをおこなう 2021(令和3)年 6月10日発行



●発行人 社会福祉法人あさみどりの会

〒464-0027 名古屋市千種区新池町 1-18-2 TEL:(052)782-2233 FAX:(052)782-3513

(ホームページ)

[あさみどりの会](#)

[検索](#)

(メール) asamidori@asamidori.net

No. 556

【インタビュー】

ダンスのちから

— 今までにないメッセージをつくる —

GOROさん(『STUDIO CAVE』ダンスクリエイター)

中野則恵さん(社会福祉法人あさみどりの会 学齢児支援コーディネーター)

聞き手 追分伸夫(社会福祉法人あさみどりの会 事務局長)

ダンスとの出会い

追分 今日、GOROさんの人となりも含めてお聞きできればと思います。

まずは、GOROさんのプロフィールをお願いします。

GORO はい。昭和54(1979)年生れの現在41歳です。

ダンスを始めたのは高校1年生の終わり、16歳のときです。伏見にあるダンススタ



ジオに通い始めました。そこでKOU先生(『STUDIO CAVE(ケイブ)』の代表)と出会い、今までずっとダンスをやっています。高校生のときはKOU先生のクラスに週1~2回通って、どんどんダンスが好きになっていきました。21歳のとき、KOU先生から「ダンスを教えてみないか」と話をいただき、安城市のスタジオで初めてダンスのレッスンを持たせてもらいました。その後、知多市でも子どもたちにダンスを教え始めました。そのころは、ダンスだけではやっていけないので、ずっとアルバイトをしていましたね。そしてちょうどそのころ、KOU先生が『前衛ストリート舞踊集団CAKRA DANCE COMPANY(チャクラダンスカンパニー)』を発足し、僕も立ち上げから籍を置いて今年で20年、当初から世界を目指して活動しています。



海外での経験としては、CAKRA ができて10年目、『インドネシア バリアートフェスティバル』で現地の国立楽団、現地のナンバーワンポップスバンド、ギタリストのSEKI SHOWさんと共演しました。国立楽団の人たちの奏でる JEGOG : ジェゴグ(木琴ぐらいのサイズのものから人が乗れるくらい巨大な竹筒楽器)、バンド、シンガーと、

僕たちのダンスとでコラボレーションしました。大きなお寺の広場にお客さんが3万人くらい来て、大きなお祭りみたいな感じでした。そのメインのプログラムで踊りました。これが僕にとっては海外での初めての舞台となり、自分の中ではとても大きな出来事です。

その後、『福岡ダンスフリンジフェスティバル』に、7回出場しました。福岡は韓国と近いのもあり、海外からのプロデューサーが、良い舞踊団を探す目的で見にきています。多くの舞踊団は2~3人の少人数で構成されていることが多いのですが、CAKRAのメンバーは10人ほどいます。移動などにお金がかかるので、通常、メンバーの多いチームは呼ばれにくいのですが、それでも韓国で踊ってほしいとお願いいただき、2012~2019年の間に5回、韓国へ招へいしていただきました。

また、コンテンポラリーダンスの先生とのつながりで、「移民の人たちが移民先で差別を受け、生きにくいことを言葉に出せない現状(特に女性)をアフガニスタン出身の活動家さんが本にしている、この本を舞台にしてほしい」という依頼をいただき、CAKRAもプロジェクトのメンバーになり、参加いたしました。読み物だけではなくダンスで表現することによって、こういう人たちがいるということをもっと広く知ってもらえるのではないかとということです。2019年、活動家の方の移民先であるノルウェーに行き、実際にノルウェーに移民している学生たちと一緒にコラボレーションしてダンスの舞台を披露してきました。それ以外では、ダンススタジオ、高校(芸術の専修学校)、スポーツクラブ、あさみどりの会の事業所などでダンスを教えていて、今はダンスだけで生計を立てられるようになりました。

繋がっていく出会いの中で

追分 16歳でダンスに出会う前に、何か自分にとってこれだというものはありませんでしたか？

GORO それまでは本当に何も続かなくて。サッカーも小学5年から中学2年までやりましたがそれ以上は続かなくて、何か打ち込めるものがほしいと思っていました。ちょうどそのころ、付き合っていた彼女がダンスを始め、3ヶ月くらいして見せてもらいました。今思えばそんなに踊れてはいなかったと思うのですが、そのときはかっこよく見えて、ちょっとやってみたいなと思いました。でも、やってみたら全然できなくて。“右・左・右・右”のステップが踏めない。軽く馬鹿にされ、悔しくて、ダンススタジオを探し、ダンスを始めたんです。ダンスを始めたこと、彼女には1年くらいずっと隠していましたが、別々で参加したダンスイベントでバッタリ。「なんているの？」ということになって、「実はずっとダンスをや

っていて」と話しました。その後、彼女とは一緒にダンスチームを組み、ショーやコンテストにたくさん出ました。

追分 彼女の一言がなかったら？

GORO そうですね、彼女に小馬鹿にされなければ、また、ダンスが簡単にできていたら、やっていなかったかもしれませんね。

追分 最近、Dリーグ(日本初のダンスのプロリーグ)を見ましたが、皆さん、一生懸命やっているのがすごく伝わってきて、命削ってやっているんだなと感じました。GOROさんも、たまたまきっかけが彼女の一言であったかもしれないけれど、やっていく中で後々に繋がっていく出会いというか、KOU先生やCAKRAのメンバーの方たちとの取り組みの中で、どんどん世界が広がっていった、ということですね。

私もある人との出会い、あさみどりの会顧問、島崎春樹さんとの出会いがなければ、今ここにはいない。振り返ると「ああ、この出会いが大事なポイントだったんだな」と思うのだけれど、暮らしは毎日流れていくので、その中で何がポイントなのかは、日々の中ではなかなか感じにくいこともありますね。

GORO そうですね。振り返ってみると分かるときがありますね。

追分 お話を聞いていますと、ダンスを突き詰めて極めていくという思い入れをずっと持ち続けてこられたと思いますが、当法人の事業所である、さわらび園(児童発達支援センター)卒園の学齢児、あらくさ作業室、わらび福祉園(現あさみどりの風わらび)で、ハンディキャップのある人たちの表現活動として取り組む、最初のきっかけは何だったんですか？

GORO 平成28(2016)年、小牧のダンススタジオ『STUDIO CAVE』の代表をKOU先生がやることになって、僕もそのスタッフ兼インストラクターになりました。そのスタジオの前オーナーさんが、障がい者支援にも熱い方でCAVEになる前のスタジオのときから、障がい者レッスンがありました。

ですがCAVEになってからは障がい者レッスンがなかったんです。なのでオーナーさんから「誰か障がいのある方のレッスンをやってくれないかな」とKOU先生に相談があり、KOU先生が「GOROがいいんじゃないか」と提案してくれました。また、自分の生徒の中に一人、知的障がいの方がいて、なんだか縁があるのかなと感じ、やってみようと思いました。

追分 それまで、福祉や障がいの世界とは？

GORO まったくと言っていいほど、つながりや関わりはありません。

大人の方は、電車に乗っているときや街で見かけるくらいですかね。一方でお子さんは、小・中学校に支援学級はありましたがクラスの距離が遠かったので、かわいらしいというか、子どもっぽい感じは受けましたが、どのような目線でいたらいいのか、どうやって接したり話しかけたらいいのか全く分かりませんでした。なので、学齢の子どもたちにダンスを教える前に、まずは音楽療法を見学させていただきました。

追分 障がいのある方たちとやってみようということについて、戸惑いはありませんでしたか？

GORO 実は、僕自身もうつ状態になったことがあって、21歳から7～8年、頭の中がグルグルしちゃって、精神的に不安定になっていたときがありました。その経験を経たあと、知的障がいのある生徒さんと出会って、自分と同じような感覚があるのかなと思いました。自分はなんとか克服できたので、これを広げられたらいいなという思いは結構あったかもしれませんね。だから興味が湧いていたというか。

人間って心閉じてしまうとやばいなと思っていて、心を開いていかないと、いろいろなものがどんどんたまって毒になるので、どんどん出していかなくてはいけないのに、出せないときってあるよなって思ってた。そして、出せないときが僕にもあったので、こんなアドバイスをされたらちょっとは楽になるかな、と考えたりもして。

追分 7～8年って長いですね。

GORO そうですね。一番ひどいときは、電車に乗ってくる人たちが話していること全部、「あの人、何とかだよな」って、僕のことを言っているような感覚になっていたんで、これは危ないなと思って。いきなり暴れちゃいそうだったんですよね。

追分 それは苦しいときでしたね。

GORO はい、でも仲間もずっと大丈夫と言ってくれていて、だんだん大丈夫かな、と心が休まるようになって。今は、次はならないだろうな、あるかもしれないけれど、きっと乗り越えられるだろうなと思っています。

ダンスってすごい ～広がる可能性～

追分 あさみどりの会との付き合いが始まって数年たちますが、実際にやってみた中で、特に思い出に残っている出来事を教えてください。

GORO 令和元(2019)年6月、『金山にぎわいマルシェ』に、30分の枠をもらって、さわらび園学齢児とわらびとの合同で出演しましたが、このときは結構盛り上がりました。小学3年生から大人の方まで集まって合同練習も行いました。それぞれのグループで作品はつくっていたのですが、その他に、フリーで踊る時間もつくりました。それがすごく面白かったですね。

追分 フリーということは、振り付けを決めないで？

GORO そうです。僕がマイクを持って「次、〇〇君、行ってみよう！」みたいな感じでみんなのテンションをあげて、自由に踊りました。普通にダンスを習っている子たちも、習ったダンスならできるのだけれど、アドリブで自由に踊るって結構難しくてなかなかできない。でもそのときはみんなアドリブで踊っていたので、すごいと思いました。テンションと勢いで乗り越えられるんだなと思いました。

追分 最近、我々の業界では“意思決定支援”ということをよくいいます。意思表示力といいますか、例えば寝たきりで言葉もない、傍目では何を考えているのか分からないような障がいの非常に重い方にも意思があり、当然、決める権利はご本人にある。そして我々は、彼らの気持ちや思いを100%引き出す努力を最大限しなければならぬ。それが今、世界のスタンダードになっていますが、実際には難しいことも多々あります。しかし今のお話から、発表の舞台上、ダンスで自由に表現しようという気持ちがそれぞれの方にしっかりとある。ダンスに限らないとは思いますが、芸術的な活動というものが、自分の気持ちを表現するための、一つの大事なツールになっていると感じますね。

GORO それまでに発表も何回か経験して、フリーで踊る練習も少しずつ重ねてはいました。

追分 やはりそういう蓄積も大切ですね。気持ちを引き出すための積み重ねを GORO さんにしてもらった



という、一つの成果だと思えます。

中野 合同練習はよかったと思います。互いに刺激し合っていましたね。大人の方たちのダンスを見て子どもたちが頑張るし、子どもたちを見て大人の方たちのテンションが上がる、相互作用みたいなものは感じました。子どもたちだけで踊っているのとはちょっと違う。子どもたちが大人の方の動きを真似して、そこに自分のオリジナルが入る、やってみたら結構やれちゃった、そして自信になる、というような。

追分 いろいろな立場や状況の人が集まって、一緒に暮らしているのが我々の地域社会です。GOROさんの海外での活動の話にも通じますが、人との関わりの中でもらう刺激が、自己表現に影響を及ぼすと思うと、ダンス活動でも、いろいろな人たちとコラボしながら関係を作っていくというのは大切ですね。

GORO そうですね。表現が広がりますね。

追分 他に何か印象に残っていることは？

GORO A君。わらびの利用者さんで、CAVEの障がい者レッスンにも来てくれているのですが、彼が最初に来たときと現在との、身体の可動範囲や動かし方が劇的に変わっていて、こんなに変えられるんだ、ダンスってすごいな、と思いました。

最初の印象は、なんだか自分を守っているような、前かがみにギュッと縮こまっている感じで、両手でしっかりとした万歳ができませんでした。それが今は完ぺきではないですが、手を伸ばすことができるようになってきて、ここまで成長したんだなと思って。

中野 最初は両足を横に広げることもできませんでしたね。前後には広げられるけれど、「足を横に広げて」が分からなかったです。

追分 そうというのは、メンタルと関係しているのでしょうか。気持ちが開放的だとうまくいく、逆にうまくいかないとなんとなく縮んじゃう。

GORO そうだと思います。全員ではないですが、ダンスは気の弱い子や暗い子が逆にハマったりします。なぜかという、ダンスを通して今まで出せなかったことを身体で表現できるようになるからです。普段やらないような動きを、ダンスの中ですごくカッコつけてやってみると楽しいというか、心が強くなった感じになる。「どうだ！」と自分を見せることができる。初めは恥ずかしいかもしれないですが、慣れてくると自分の内側からエネルギーを出している感じが分かってきます。

身体の動きから精神を変えるというか、外から内面を改善していくことが絶対にできる、そういう力がダンスにはあるんだと気づきました。

追分 身体だけではないし気持ちだけでもない。両方がバランスをとることで効果が得られるのですね。

音楽を楽しむために必要なこと

追分 子どもと大人、そして高齢者、それぞれの年代の方たちにダンスを教える上で、何かポイントとなることはありますか？

GORO 使う曲でずいぶんと変わりますね。僕はヒップホップをメインにダンスを教えているので、できるだけヒップホップから外に出ないようにしようという気持ちがあります。

ダンスには、NHKのおかあさんといっしょで踊るようなダンス、アイドル系のダンス、いろいろなスタイルやジャンルがありますが、僕はヒップホップのインストラクターなのでそれ以外を教えるのは得意ではない。やれないことはないと思いますが、進んではやらない。できるだけヒップホップに引き寄せたいという気持ちはあります。その中で小さい子、幼児や小学生低学年の子たちは、ビートの効いた濃い目のヒップホップの曲が似合ったりする。歌っていることがあまりによくない英語なら使いませんが、また、

中高生は、今どきのテンポが速い曲が好きです。一方、50歳代以上の方は、80～90年代の曲、例えばマライアキャリーやマイケルジャクソン、そういう感じの曲を使うとテンションが上がります。使う曲の影響は結構大きいと思います。

それから僕は細かくて速い振り付けよりも、分かりやすく大きな振り付けが好きです。なので、小さい子や高齢の方、障がいのある方の振り付けをする方が得意かもしれませんね。



追分 私は以前、長野の特別養護老人ホームで働いていたとき、音楽療法でお年寄りの方たちにとって馴染みのある曲に合わせて簡単な体操をやりました。皆さん身体を動かす、声を出すことですごく表情が変わる。それも一つの内面の表現だなと、今になって思います。身体を動かす、声を出すという人間なら通常当たり前にやっていることが、特別養護老人ホームだと制約された暮らしになっているので、そういった機会そのものが乏しくなっています。だからあえて、そのような時間を設けることで、少なくともその間、皆さんのテンションが上がっている感じがありました。気持ちの抑揚は人が生きていく上で重要なファクターだと当時も思いましたし、今の GORO さんの話を聞いていて感じるどころがあります。

GORO わらびの活動では2部、やらせてもらっていました。1部は身体を動かせるメンバーで、2部のメンバーは、重度の方や高齢の方などでした。最初はどうかやっていいのかわからなかったのですが、皆さんと関わる中で、周囲の人やリズムに合わせて手をたたくことが難しいということに気づきました。両手を左右に“開く”ということがきちんとできないため、まずは、リズムの表と裏を取る、ということをお伝えなければと思いました。音楽と一緒に楽しむためには必要なことだと思って、手拍子を合わせることにめちゃくちゃ時間を使いました。最近では、わらびの活動がコロナの影響でできなくなり、そのことを研究する機会がなくなったので、どこかでまたやれたらなと思っています。

追分 小さな赤ちゃんを見ていても、嬉しいんだろうなというときに、手をパチパチしていますよね。感情表現の原点がこの手拍子かもしれないし、そういうのが発展して一つのダンスの動作になるような、そんな感じもしますね。

GORO あるミュージシャン(ギター講師)の方が「今の子はリズムがとれない…」と言っていました。また、「楽器を弾く一つ前に身体を動かして音を鳴らす、たたく、踏む、そういうことが大事」だと言っていたのを思い出しました。

追分 アマゾンの原住民の方など、決して文明的な暮らしではないが、大昔、おそらく人間はこうした生活をしていただろうなという人たちは、お祭りなどで、まさに自分の身体で喜びを表現している。原点というか、人間は気持ちを身体の動作で表す動物なんだなと思いますね。知的にハンディがあるなしに関わらず、人ってそういうものなのだから、自分の気持ちをうまく表現することのできない人たちの気持ちを引き出して、それをエネルギーに変えて発散させることのできるダンス活動は、心身の健康の上でも意味のあることだな、と思いますね。

GORO そうですね。

今までにないメッセージをつくる

追分 次に、国際的にもダンスを生業として生活をつくっていくという思いの部分と、知的にハンディの

ある皆さんのお付き合いを始めたところで、これから先の GORO さんの夢や希望をお聞かせください。
GORO 個人の夢、とは少し違うのですが、日本のアートなダンスや芸術的なダンスがもっと身近になって、たくさんの方の目に触れるような世界になったらと思います。海外には国立舞踊団が多くあって、一般の人が日常的に劇場に足を運ぶようです。日本ももっと発展してそうなったら良いと思います。逆に質問ですが、ダンスの種類って、どれくらいご存じですか？

追分 知らないなあ。街中や公園でやっているダンスですか？

GORO そうですね。例えばバレエや社交ダンスなど、ダンスといってもいろいろなジャンルがあって、それぞれが全く違います。ストリートダンスは、大きく分けてそういったダンスの一つのカテゴリーですが、その中にはヒップホップがあったり、ブレイキングやロックダンスなど、さまざまなジャンルがあります。そういったジャンルが徐々に一般の人たちにも浸透していくと良いと思います。

最近では、Dリーグなど一般の人がダンスを見る機会が多くなったり、小・中学校でもダンスが必須科目になってきて、少しずつ踊れる子たちの割合は増えていると思いますが、障がいのあるなしに関わらず、もっともっと多くの人にダンスになじんでほしいという希望があります。

一方、個人的には、今まで関わってきた障がいのある人たちと、一般の人たちと一緒に、何か作品を作りたい、舞台を作りたいという思いというか、目標があります。

追分 先ほどの話にもあった相互作用で、よりよい感じでできそうですね。障がいがある人たちだけで集まるよりも、そこに色々なジャンルや立場の人が加わることで、どのような効果が出てくるのか、まだ見たことのない面白さがあったりすると思いますね。

GORO いい意味で、障がいがある人とない人のガスが抜けるかもしれない。たまっていたものが外に出て互いに新しい風が入って。

振り付けを踊るといふダンスもいいのですが、言葉にない表現としてのダンスで、深い意味で障がいを越えることができるかもしれませんね。

追分 一つの作品としてのダンス表現、そんな感じですかね。

GORO そうです。そういったことをやってみたいですね。

以前、小牧のある事業者さんに CAVE のチラシを持っていったとき聞いたお話ですが、障がいのある人とない人で舞台を一緒に作ったダンス講師の方がいるという話を聞いて、すごいな、やってみようという思いがありました。

追分 夢が膨らみますね。私どもの法人だけで完結するのではなく、そこに人が集まってきて物語をつくるというか、そういう感じで…。

現在、いろいろな活動がコロナでどんどん制約されて、今までの当たり前が当たり前ではなくて、今の制約された生活が当たり前になっていきそうな、非常に窮屈な感じがあります。しかし、人の活動の根っこは変わりようがないと思うので、コロナ禍でも実現していけるように工夫しなければいけないと思います。人が対面で話をしたり、お互いの空気感やぬくもりを感じ合ったりしながら、いろいろな活動を行うことに、我々の暮らしの醍醐味があるように思います。今お聞きした GORO さんの夢が、どんな形であれ、実現するとういいなと思います。

GORO そうですね。ぜひ、きっかけをつくって下されば、頑張りますので。

心を揺さぶられる宝物

追分 中野さん、何かありますか？

中野 私は、舞台に出ているときの子どもたちだけではなく、舞台裏が面白いと思っています。子どもた

ちのドキドキ感がビンビンに伝わってきて、そこに GORO さんが絡んでいく。GORO さんが本番の舞台に向けて、子どもたちの気持ちをどのようにして最高に持っていくのか、舞台にどう乗せていくのか。リハーサルを含めて、GORO さんの子どもたちへの関わりは、さすがプロだと思います。

舞台袖で出番を待つ子どもたちの表情は、特にいい。

GORO そうですね、心がすごく動く。

中野 そうなんです、心がすごく動いているのが分かります。だから面白い。

大人の方たちも同じです。以前、グループホームの研修会で、わらびの皆さんが出演したことがあり、私もその場に立ち会うことができました。舞台もちろん、素晴らしかったのだけれど、舞台に上がるまでの彼らを知ることができてよかったです。言語で表現のできない方がピョンピョン飛んでいたのですが、その人のドキドキしている表現なんです。それが分かるから、声かけも「落ち着きなさい」ではなく、「ドキドキするよね」って、共感ができる。

ダンスの舞台に立つ前の彼らの心の動きに出会えることも含めて、私はみんなと、そして GORO さんとダンスをすることができて、本当によかったと思います。

GORO レッスンから発表までであると、そこまで一つ、成長する感じがありますね。一つやり遂げた、そしてまた、次の発表に向けて頑張ろうと思います。

中野 達成感がありますね。言葉がない子も「頑張ったね!」「やったー!」みたいな高揚感を感じていると、実際に発表までのプロセスを一緒にして思いました。

追分 そういうことを知ると、心から感動できますね。

心を揺さぶられるような、本人さんたちにとってもいい経験になっているし、それを支える私たちもそんな彼らを見ることによって共感できる。だから、私たちが心の宝物をたくさんもらえている活動なんだと思います。

今後とも、末永く、よろしく願いいたします。

GORO ありがとうございます。



☆

☆

☆

お知らせ

☆

☆

☆

コロナ後を見据えた地域づくり

【第 58 回 心身障害問題を考える集い】

2021年7月3日(土) 14:00~16:00 WEB 開催

新たな地域のあり方と社会保障の未来を考える

菊池馨実氏 早稲田大学 法学学術院 教授

14:05~15:05 講演 <休憩 10分> 15:15~16:00 質疑等

定員：80人(定員になり次第切ります) 参加費：無料

申込み：下記申込先へ TEL、FAX、E-mail、又は申込みフォーム(QRコード)にて事前の申込みをお願いします。

申込先：あさみどりの会事務局 名古屋市千種区新池町1-18-2(担当：追分)

tel 052-782-2233 fax 052-782-3513 mail asamidori@asamidori.net

*申込受付確認済みの方には、開催2週間前の6月19日から随時研修参加用のIDとパスワードを送ります。



(申込フォーム QR)

主催：社会福祉法人あさみどりの会・社会福祉法人あさみどりの風

後援：愛知県・名古屋市・社会福祉法人愛知県社会福祉協議会・社会福祉法人名古屋市社会福祉協議会 社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団

一般社団法人愛知県知的障害者福祉協会・社会福祉法人名古屋手をつなぐ育成会

NPO 法人愛知県自閉症協会「つばみの会」・社会福祉法人 AJU 自立の家

大好きな人に伝えたい『気持ち』

中野 則恵

私が GORO(加藤吾郎)さんと出会って5年になります。学齢児支援で表現やダンスなどに特化した活動をやってみたく思っていた、ちょうどそのころのことです。

初めて子どもたちと出会った日、療育室に「こんにちは」と入ってきた GORO さんは、程よい距離感で子どもたち一人ひとりに関わりながら違和感なくその場に溶け込んでいきました。GORO さんは子どもたちの心を包み込む、天性の雰囲気を持っている人だなと感じました。

こんなことがありました。B君はそれまで集団から外れることなくその場にいるという状況で参加していましたが、少しずつダンスに意識を向けることができるようになり、例えば、新しい振り付けに対して分からない、難しい、というような感情をいだき始めたようでした。でも、今までそんな自分自身の気持ちを表現する経験がたぶんなかったであろう B君は、その気持ちをどう表したらいいのか分からなかったのでしょうか。突然大声で叫んだり、その場で暴れたりするようになりました。GORO さんには、なぜ B君がそのような行動をするのかを伝えました。GORO さんは B君に心を寄せて常に気にかけていました。

ある日、GORO さんから「ちょっと難しいけれど、大丈夫でしょうか？」と確認された課題に対して、私も不安はありましたが、とりあえずやってみることにしました。やり始めてしばらくすると突然、B君が『ワッ！』と大きな声で叫びながら GORO さんのところへ走って行って、GORO さんをたたきました。すぐに B君と場所を移動し落ち着くまで待ってから、「B君、どうしたの？」「よく分からなかった？」と聞くと B君は『分からなかった』と応えました。「そうか、分からなかったことを、GORO さんに言いたかったんだね』『言いたかった』『そういうときは、GORO さんに“分からない”って言えばいいんだよ。言いにいく？』『いく』。そんなやりとりをして、B君は GORO さんに向かって『分からない』と伝えることができました。GORO さんは B君の思いをしっかりと受け止めたあと、B君に分かりやすい課題に変更。B君はダンス活動に戻ることができました。

今まで叫んだり暴れたり、自分の気持ちを自分の身体で表現していた B君。でも自分の気持ちを GORO さんに伝えたいと思い、GORO さんに向けて表現するようになったんだと、私はとてもうれしく感じました。そしてそのころから、B君くんは活動が終わってもすぐには帰らず、GORO さんのもとに行って何かしら話しかける姿が増えていきました。B君は GORO さんに対して、自分をありのまま受け入れてくれる、気持ちを分かってくれる人だという信頼する気持ちを持ったのだと思います。

“伝えたい気持ち”は、伝えたい人がいるから生まれてくるのだと思います。そして“伝えたい人”は、その人にとって大好きな人、大切な人、信頼している人です。ハンディキャップのある彼らに、家族や私たち支援スタッフではない、GORO さんのような外部の方で“信頼できる人”がいるということは、彼らの人生にとって、とても貴重な財産だと感じます。

GORO さんは固定概念にとらわれず、常にイノベーションを生み出そうとしています。活動を通して疑問に思ったこと、感じたことは確認し、修正していきます。そんな柔軟性がハンディキャップのある彼らへの関わりにも大きく関係していると感じます。世界を目指して活動している GORO さんを通して、彼らの気持ちが育ち、自己表現、自己実現に繋がっていくよう、私はこれからも GORO さんと一緒に取り組んでいきたいと思っています。

気持ちを表現しながら自分で選択するまでのプロセス

高松 聡子（さわらび園卒園児保護者）

利來(りく)がダンス活動に参加したのは小学1年生からです。さわらび園での学童療育でいろいろな経験をしてほしい、水泳や体操のような習い事代わりになればと思い参加を決めました。

GORO さんや中野先生のご指導のもと早いもので5年経ちましたが、このダンス活動を通して利來はさまざまな状況の中でたくさん心を動かしてきました。うまくできなかつたり先生方に指摘されたことでイライラしたり、新しい振り付けや曲に不安を感じたりする気持ちを自分の中でうまく切り替えられないことが多く、私はそんな利來の姿を見聞きし、成長を感じつつも悩みがつきませんでした。

そんな中でも大きな成長を感じたことがあります。利來は人前に立ち何かをすることが苦手です。特に終わったあと、私と顔を合わせるのを極端に嫌がりました。初めて母親たちの前で日ごろの練習成果を披露したときのことをよく覚えています。終わったあと、みんなは自分のお母さんのところへ駆け寄り褒めてもらっていたのに、利來は今にも泣きそうな表情をしながらも決して私のそばに来ることはありませんでした。本当はやりたくなかったのにやってしまったとい



う気持ちなのか、はたまたあまのじゃくな性格から素直に甘えられなかったのか…。それとも口うるさく厳しい私が何か言うのが怖かったのかもかもしれませんし、穏やかに見ていたつもりですが目が怖かったのかもかもしれません(笑)。正直そのときの利來の気持ちをしっかりと分かってあげられたわけではなく、それよりも私のもとに駆け寄ってこられない彼を理解してあげなければと自分に言い聞かせつつ、駆け寄ってくれない寂しさが大きかったように思います。ですがその後、みんなの前で披露する機会を重ねてきたことで、次第に照れながら距離を縮めてくれたり緊張感から解放され素直に泣けたりとさまざまな変化を見せてくれました。また一つ大きくなった、たくましくなったと感じずにはいられませんでした。

他にも多くのことがありましたが、現在利來は「選択する」という場面を迎えています。それなりに順調に見えていたダンス活動に変化が出てきたのは5年生の3学期頃です。ダンスに行くのを渋るようになりました。今まで学童療育に行き渋ることがなかったので驚きました。久々に練習の成果を見る機会もあったのですが、私が思っていた以上にやる気のなさそうな動きをしていました。

最近の様子を見て中野先生から「本人はダンスがやりたくて来ているのだろうか？」と聞かれました。そこで利來に聞くと「みんなの前でやるのが嫌」とのこと。ある程度克服できたと思っていましたが本人にとってはストレスなようです。でもそこから私が思ってもいなかった本人の考えを聞くことができました。身体を動かすのは好きだけど学校の体育みたいにいろんなことがしたい。ワンダー(学童療育のグループ)は楽しいけどダンスは楽しめないことが多い。でも習い事がなくなるのは嫌なこと…。ただ何となく行っていると思っていた学童療育やダンス活動を習い事と位置づけ、こんなにも本人なりに考えていたんだと大きな成長を感じました。「せっかく続けてきたのだから6年間は頑張してほしい。でもやるのは利來だし、辞めるのならそれでもいいよ」と私の気持ちを伝えました。

6年生に進級してダンスをどうするのか再度聞きましたが、まだ自分の中で答えが出ないようで保留中です。ここまで活動を続けてこられたのも GORO さんと中野先生のおかげだと思っています。彼がどんな結論を出すのか分かりませんが、ダンス活動を通じて一緒に考える中で、たくさんの心の表現をしながら成長を重ねてきた彼の選択を楽しみに待とうと思っています。

【子どもたちにきいてみました】

ダンスをされていて、楽しいことは？

準備運動やアイソレーション。

みんなと一緒に踊るのが楽しい。

柔軟な動きや高度なパターンが踊れるようになったとき。

ダンスじたいがたのしいとおもいます。

ダウンやアップです。

おんがくがかっこよくて楽しい。



ダンスでむずかしいことは？

音楽なしならできるけど音楽があるとはやくておくれる。

こしだけを動かすアイソレーション。

やっぱりすてっぷがむずかしいことだと思います。

ランニングマンステップ。反対にならないようにするのが難しいです。

体をすばやく動かすのが難しい。

首のアイソレーション。

いきなり動きが変わったり、速すぎたりすると、ついていけず、まちがえてしまいがち。

すべて。初めてやること。



GORO 先生はどんな人？

おもしろい。

ダンスのセンスがあるプロ。

みんなが分かるまでとことんつき合う面倒見の良い先生だと思う。

いつもうれしそうににこにこしている。

情熱的な人。

明るい人。やせてる人。

ダンスがうまくて、私のあこがれの人です。

とてもやさしくて、教え方が上手。

これから、どんなダンスを踊ってみたい？

アイソレーションを使ったかっこいいやつ。

JPOP(AKB48、嵐、キンプリ、平成ジャンプなど)。

むずかしいダンス(けがしないやつ)。

ちがうしゅもくのダンスもおどってみたい。

もっとこれからもいろいろなダンスを踊ってみたい。

自由にダンスを一人でおどる。

ゆっくりなステップをおどりたい。



昭和原人のつづやき ③

Column [連載]

あさみどりの会顧問 島崎春樹

ハングリーから学ぶ

私が尋常高等小学校高等科1年（現在の中学1年）の春、父が運良く戦地から生きて帰ってきた。私は農繁期に学校を休まなくても良いし、日曜日友達と遊べるようになった。この頃の思い出を一つ挙げるとしたら「野球」である。敗戦から2年、中学2年（この年から新制中学）の時、私の村落に中1と中2の男子生徒がちょうど9人いた。皆に野球チームを作らないかと呼びかけた。まだ自分で厚めの布を手形に切って縫い合わせた手作りグローブに、芯に小石を入れ布で包んで糸でぐるぐる巻いて作ったボールでキャッチボールしていた。野球道具を買う余裕はどの家にもない。自分たちで働いて買おうということになった。プロ野球も始まっていて、新聞にも載るようになった。村の若い衆も野球チームを作って学校の運動場（グラウンド）で練習や試合をするようになり、近所の人も見物に来るなど、そうした野球ブームは、敗戦で疲弊していた子どもや大人の心を元気づけた。

こうした動きを見て9人の団結も強まった。仕事は木炭自動車の燃料用の木材を山から馬車の通る村道まで運ぶというもので、地主に交渉して1間（180cm角に積み上げた木材）400～500円位で請負ったと思う。太さ10～15cm位、長さ90cmの丸太を何本か、小さな背中に背負って、山から細くて急な坂道を汗と埃にまみれながら下るといふ苛酷な作業であった。冬は雪が降るとソリを使えるので多く運べるが、急な坂道を木材を積んで滑り下りる危険な仕事であった。そのお金で次の年の春、私も含め代表3人で関市まで道具を買いに行った。革製品だと持ち金でグローブ3個位しか買えないので、布製のグローブ・ミット（ボールの当たる真ん中だけ丸く革が縫い付けてある）を9個と、バット2本、ボール3個を手に入れた。前年夏休みから農繁期以外の晴れの日曜日、冬休みから春3月まで、断続的ではあるが8ヶ月かけてようやく実現し、子ども心にも達成感を味わうことが出来た。私にとって目的をもって集団活動をした最初の経験であった。私はその後選手にも選ばれて、他校へも試合に行くようになった。ユニホームは中3女子が家庭科の実習で縫ってくれた。社会や教育が激変した中学生時代であった。

高校は貧乏だったことと父が病弱で、農作業は15歳の私が背負わなければならなくなり、父は役場で事務仕事に就き、私は働きながら前年（昭和23年）設置された定時制高校に通うことにした。高校の様子は昭和62年3月、定時制閉校の時の記念誌に掲載された文章から窺えるので転載することにした。

私は郡上高校定時制昼間部を昭和28年に卒業しました。昼間部は週4日登校し、あとは家で農業に従事し、春と秋の農繁期は家で、夏休みに登校しました。教室は旧郡上農林の寄宿舎を改修した部屋で、狭く天井も低いので夏の暑さも大変でしたが、冬はすき間風が入り、破れたガラス戸にベニヤ板を張ってしのいでいました。体育の授業は全日制と一緒にでしたが、全日制の生徒でも出来の悪いのがあると、先生が「お前定時制か」と言われ、教師の意識においても、物理的な待遇の面でも、強い差別を感じました。働きながら学ぶという苛酷さもあって、入学した時25人だったクラスの仲間は途中大半がやめて、卒業したのは6人でした。

私はその後縁あって、農業から社会福祉の仕事に転じ、家庭に恵まれない子や、競争社会から落ちこぼれた青少年、そして心身に障害を持った子どもたちにかかわってきました。私がこの子らの心の痛みを少しはわかる人間になれたのだとしたら、ややハングリーだった青春が、根のところで支えてくれているように思うのです。（島崎春樹）

— 郡上高校定時制閉校記念誌「星空に仰ぐ」より —